

## 「岩手県のイルカ漁」

吉村健司（東京大学）

現在、岩手県内におけるスーパーマーケットではクジラやイルカ（以下、イルカ）肉が売られているのを見ることが出来る。その産地は、青森県や海外からのものもあれば、岩手県産も見られる。特に11月から4月にかけて販売されているイルカは主に岩手県山田町で水揚げされるイシイルカ（リクゼンイルカ）である。山田町は歴史的にイルカ漁が盛んに行われてきた地域である。岩手県の中南部の沿岸地域はリアス式海岸地形で、なかでも山田湾の大浦や大船渡湾の赤崎は特に奥まった地形によって明治期には追い込み漁が盛んに行われてきた。大正末期になると、岩手県では突棒漁が導入され、突棒漁によるイルカ漁へと発展していく。その後、鉄砲式の突棒漁も導入され、イルカの漁獲量向上に寄与した。現在、岩手県において流通している県産イルカは突棒漁によって行われている。明治期の岩手県では、その沖合でマッコウクジラの漁場が報告されている。沿岸地域では「クジラー頭寄れば、七浦が栄える」といって、寄り鯨は地域経済に大きな利益を生み出す象徴とされ、マッコウクジラなどの寄り鯨を利用してきた歴史がある。洋野町や宮古市、釜石市などでは、供養碑をはじめとした、それらの縁をみることが出来る。また、1890年頃に捕鯨を事業化する動きが見られ、1904年頃には釜石では捕鯨会社の誘致も始まり、捕鯨会社数社が釜石を拠点に捕鯨業に従事したものの、その後は撤退している。このように、岩手県におけるイルカ漁をめぐる歴史は追込漁や突棒漁による捕鯨、寄り鯨、捕鯨基地といった3タイプの歴史をみることができる。本報告では、こうした岩手県におけるイルカ史に触れるとともに、その利用についての報告を行う。